

佐々木怜央 -30年前に見た未来- 作品コメント

	<p>「暖かい光」</p> <p>私たち人類が火を扱うようになり、現代では宇宙にまでも火を持って行っていける。そして近年目まぐるしく進化する人型二足歩行ロボットや人工知能などの技術は人類にどのような意味を持つのかを考えたときに先端の独立した心を持つロボットが過去の人類のように火を扱うようになった時来にどう影響していくのかという問いがテーマ。</p>
	<p>「宇宙飛行士」</p> <p>防護服を着ている人物像。全身を保護する宇宙服を切るとこで人間だけが宇宙へ旅をすることができる。レモンをヘルメットに見立てた。</p>
	<p>「視界と閉ざして」</p> <p>頭に被ることをテーマとしている。自分が生まれた頃にはまだそれほど普及していなかったインターネットはある種世界を変えたと考えている。電子メールや電話で、地球の裏側の人もほぼリアルタイムで意思疎通できる世の中知りたい情報も手に持つ端末から簡単にアクセスできる。そのほか誹謗や中傷賞賛が世の中に溢れるようになった。この見えすぎる聞こえすぎる世界から少しだけ感覚を閉ざして手で触れることの意味を考えながら制作した。</p>
	<p>「朝焼けの城」</p> <p>積み木やブロック遊びが子供の頃好きで手を動かして作る事はきっと僕にとって言葉を話すよりも長くしている行為だと気がついた。フルーツを積み上げ、造形されたお城は子供の頃に積み木で制作した城に似ている。</p>
	<p>「最初の友達」</p> <p>積み木や砂遊びなど手を動かして遊ぶのが好きだった子供の頃から紙は特に多く触った素材だと感じている。空想世界を広げて制作した紙工作を思い出しながら自分の分身の様なロボットを制作した。</p>
	<p>「果物の頭部」</p> <p>果物を被り、頭部を覆い隠した人物の像。頭部は一面だけ磨かれて中は見られるものの空っぽに見えるように作っていて、顔はない。頭部を様々な果物にすり替える事が出来るこの没個性の人物はマスクで顔を覆い隠した私自身にも近い感覚がする。顔を変えるだけで全く見え方が変わる。</p>



「動かない車」

繰り返し繰り返し描いてきた車というモチーフ。
古くなって動かなくなってしまったものでも、存在感のあるものは車庫の中に残っていて、
乗っていた人物やその時代を思い出す手がかりになるような気がしています。



「空に溶ける」

コミカルな形のロケットをモチーフとしている。
最近宇宙にカメラを打ち上げる企画に参加し、皆一様に打ち上がった物体を見つめ、
小さくなって目に見えなくなるまで見つめていた。打ち上げたロケットが空の中に溶けていくイメージの作品です。